

---

# 学園のアイドルと少年

琥珀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園のアイドルと少年

### 【Nコード】

N8987W

### 【作者名】

琥珀

### 【あらすじ】

平凡をこよなく愛し続けてきた少年、工藤悠は、ある日、突然学園のアイドル 一之瀬綾香から告白された。勉強ができるわけでもなく、スポーツが優れわけでもなく、イケメンというわけでもない（本人談）悠にとっては予想の欠片もしていなかった。さて、これから悠の生活に何が変わるのだろうか。

## 人物紹介

### 登場人物一覧

#### 工藤悠

今作品の主人公。本人曰く、イケメンでもなく、スポーツに優れるわけでもなく、とりわけ勉強ができるわけでもないと言っている。好きな言葉が平凡と言っており、目立つことが嫌い。ある日突然、学園のアイドルと言われる一之瀬綾香に告白されて付き合うことになる。

#### 一之瀬綾香

今作品のヒロイン。あまりにも整った容姿と性格の良さなどから、もはや学園のアイドル化。彼女が起すことはなんでも校内中の噂になる。ある日突然、悠に告白。悠だから好きになったと称しているが、理由は今のところ不明。

#### 工藤理沙

悠の妹。非常におせっかいやきで、家では悠の身の周りの世話をほとんどやっている。朝食や食生活には厳しく、朝からでも毎日凝った料理を作る。

#### 広瀬幸也

悠とは幼なじみ。悠と結衣とは幼いころから一緒におり、面白いことが大好き。悠も幼いころから被害にあっているらしい。

#### 立花結衣

悠とは幼なじみ。悠と幸也とは幼いころから一緒について、現在では、綾香とも結構仲が良いらしい。

## プロローグ 突然の告白

突然だが、この学校にはアイドルというものがいる。

アイドルとかこの都市伝説だよとか、もうその言葉自体死語かもしれないが、この学校には本当に芸能人顔負けの容姿をして、性格もよし、勉強もできるといった、それはそれはまるで漫画や小説の世界の人みたいながいる。

その人が何かしたら、たちまち噂になり、人々の注目を集めている。

まあ、俺には関係ない話だ。

そう、本当に関係のない話。俺は、ごく普通の毎日を淡々と、そして着々と過ごしていきただけだし、そんなアイドルとか言われている人を追いかけたり、ましてや付き合いたいとも思っていない。

そんな人がもし俺と何か付き合ってみる。自分で言うては悲しくなるだけだが、どうしてお前と何か付き合っているんだとか言われるのがオチだ。

俺はそういうのはごめんだし、自分の力量もわかっている。そういう人は、イケメンとでも付き合うのが通りであろう。美少女にはイケメンを、普通の人にはフツメンを、不細工の人にはブサメンを。まあ、例外もある。それは、何かに優れている人であったり、何かに堅実だったり、そういった人達が女性の人を魅惑していく。

……まあ、良いんじゃないか？ そういうのがあっても。さて、どうして俺がこんな話をしているかと言うと理由があるんだ。

それは海よりも深い話でもある訳でもない、それこそ漫画や小説にありがちな話だったりもするんだ。

「お願いします！ 私と付き合ってください！」  
告白された。

急展開で俺の思考回路がよく働いていないが、これだけ率直に伝えられたら誤解も何もないと思う。

某月某日俺は、学園のアイドルとまで言われている少女に告白されたのだった。

好きな言葉は平凡。嫌いな言葉は非日常。

平凡をこよなく愛し続け、今日のこの日までなにも目立ったことも、噂になるようなことも、ましてや事件や事故に巻き込まれたりしてない。

なのに、なんで！

嗚呼、お父さん、お母さん、今日も俺は元気にしています。

天を仰ぎながら、とりあえず現実逃避。……結論、無駄。

こんなことしていても解決法には繋がらない。そんなことはわかってる、……わかってはいるんだけど、そうせざる負えないのがこの現状だ。

だってそうだろ？ こんな好きな言葉は平凡とかぬかしている奴だぜ。そんな奴に学園のアイドル様が俺に告白なんぞ予想できるはずないだろ。こういつちゃなんだが、これを予想するよりも宝くじで1等を予想するほうが簡単だと俺は思う。

「あのっ！ やっぱり、……だめ、かな？」

いつまでも返事をしない俺を見かねてか、学園のアイドル様が俺にそう聞いてきた。

やっぱり恥ずかしいのか顔をうつむいたまま、しかし眼はしっかりと俺のほうを見ていて、手は緊張からか震えてそれを抑えるかのように組んでいて、まるでお願いするような感じになっていた。心なしかちよっと涙ぐんでいるようにも見える。

……卑怯！

不覚にもドキツとした。

そりゃあそうだろう。なにせこんな美少女から上目遣いなんかされたらドキツとくるだろう。むしろしないやつなんか不能だ。

そりゃあまあ、美少女と付き合いたいと思わなかったわけでもない。俺だつて男だ、そういうことを思ったこともあつたさ。

でも、それはそれ。まず考えてもみる、おかしいだろ？ 取り柄もない男に学園のアイドル様が告白してくるんだ？

何か裏があると考えてもおかしくない。いや、むしろ何かあると考えていい。それに仮に何もなくても、俺と学園のアイドルが付き合ったら学校中その話題に染まるし、ついでにやっかむ輩も増えるだろう。俺はそんなのはごめんだ。

まあ、どうせ裏になにかあるに違いない。とりあえず理由を聴くことにしよう。

「どうして？」

「……ん？」

「どうして俺なの？」

自分でも答えづらい質問だとは思う。だが、そのことを聴かずにはいられない。何かあるにしても、ないにしても、素直に聴いてみたい疑問を問いかける。

「貴方が好きだからです」

「……まあ、告白だし？」

「俺のどこが？」

「好きになるのに理由って必要なの？」

そりゃあそうだ。

まあ確かに、相手のここが好きで、それからこういふところも好きで、あそこいふところが好きだから貴方と付き合いたいです。といえる奴なんて殆どいないだろう。

……ていうか、そんな告白は嫌だ。

「それに、まあ強いて言うなら、一目惚れかな」と、微笑みながら

彼女は言う。

……だめだ、敵わない。

他にも、聴きたいことはあるし、対抗策もあるけど、……でも、こんなに真っ直ぐな眼をした少女には敵わないと俺は思った。

……ああ、悔しいな。

俺も学園のアイドルに　一之瀬綾香に、惚れてしまいそうだ。

## 第一話 日常

「それで、……返事聴かせてくれる、かな？」

つい見惚れてた俺に、一之瀬さんがそう問いかけてくる。

「いいよ」

思わず口に出た言葉に、一之瀬さんが一瞬固まって「え？」と、聞き返してきた。

……あれ、なんかまずいこと言ったような。そう思った時にはもう遅かったようだ。

「本当に、……いいの？」

「うん、俺なんかでよければ」

おい、なにを口走っている、俺。

信じられないというばかりに、一之瀬さんが、感激のあまりか手で口を被い、涙を流している。

あー、これは腹を括るしかないみたいだな。

ただでさえかわいい容姿に、あんな真剣な真っ直ぐな眼をしていたら、いくら俺でも本気っていうのが眼に取れる。それに、あんな笑顔を見せられたらたまったもんじゃない。

それに、どうやら俺は、思いのほかに一之瀬さんのことが好きになっっているみたいだ。

ああ、さようなら、平凡で平和な日々。

涙を流して喜んでいる一之瀬さんを見ながら、明日から大変そうだなと、不謹慎ながら頭でいっぱいになっていた。

しばらく時間が経ち、一之瀬さんもそろそろ落ち着いてきたみたい。結構の間、泣いていたためか、眼が軽く充血しているようだ。

「大丈夫？」

「あはは、ごめんね。見苦しい所みせて」

そう涙を拭いながら、微笑む一之瀬さん。



「いや、そんなことないよ。それより、本当に俺なんかでいいの？」  
「なんで？ 私から告白したのに」

本当に不思議そうに、キョトンとした表情でこちらをみる。

しかし、こうしてあらためてみると、学園のアイドルと騒がれるのもわかるような気がする。髪もさらさらだし、顔も小さくて眼がぱっちり和小動物みたいな眼をしているし、身体も出るところはでている。それに性格も良い。

確かに、このような美少女が身近にいたら、眼で追いかけたくなるし、少しでも仲良くなりたいたいと思うかもしれない。まあ、あくまで一般論だが。

「だって、一之瀬さんかわいいし、俺よりも良い人なんか沢山いるでしょ」

「私は、工藤くんだから好きになったんだよ」

「俺だから？」

うん、と頷く一之瀬さんに、更に首をかしげる。

俺、なんかしたっけ？ いや、学校内では目立つようなことは一切していないはずだし。それとも、街中で一之瀬さんに何かしたとかかな。いや、それでも、このような人を忘れるはずがない。

んー、と考えている俺が可笑しいのか、クスクスと一之瀬さんが笑う。

「まあ、工藤くんは気づいてなくて当然か、あ！ 忘れてた、今日用事あったんだ。ごめんね悠くん、また明日の朝ね」

バイバイと手を振りながら、走っていく一之瀬さんを見ながら、手を振り返すことしかできなかった。

「さん、起きてください。兄さん！」

重たい瞼をあけ、誰かと思いつつ確認してみると、鈴とした声で、俺を揺すり起こしてくるのは、俺の妹の理沙だった。まあ、そりゃ

あ理沙以外、俺を朝起こしに来る人なんかいないから当たり前か。

「おはよう、理沙」

「はい。おはようございます、兄さん」

少し欠伸をして、瞼を擦りながら今の時刻をみる。

時計の短い針が六の数字を示している。うん、いつもながらの時間だ。

「ほら、兄さん。顔でも洗ってきてください。私は朝食の支度をしていますから」

そついいながら、部屋を去っていく理沙に続き、俺も顔を洗うために洗面所へと向かう。鏡の向こうにはいつも見慣れた顔があり、そこには冴えない顔がこつちを見つめている、……冴えない顔してるな俺。

顔を洗い見出しなみを整えて、リビングへと向かうとそこにはエプロン姿の理沙がいた。

相変わらず俺の妹でありながら、整った容姿とスレンダーな肢体でも、出るところはちゃんと出るといふ、俺と一つしか変わらないというのに、何か気品があるような気がする。

「あ、兄さん。少し待ってくださいね、今運びますから」

そついい、出来上がった品をテーブルへと運んで行く理沙、本当に出来た妹である。

何もなかった食卓に、つい先ほど出来たと思われる品がどんどん埋まっていく。

味噌汁にご飯に焼き鮭にほうれん草のお浸しに卵焼き等々。朝食だからといって、ここまでちゃんとした食事は珍しいのではないだろうか？

過去にそう疑問に思った俺は妹に聴いてみたことがある。妹曰く「朝食は、一日の全ての始まりです。疎かになんかできませんか！」と、力説しながら十分近く話を聴かされた。過去今までに、朝食を食べないことなど一度もなかったが、もしそんなことがあったら、

……考えただけでも寒気がする。

「はい兄さん、お待たせしました。では、食べましようか」

そう言いながら、席に着く理沙に続いて、俺も席に着く。食卓に並ぶおかずの品々、これを理沙が早起きして、いつも毎日作っているというのだから、あらためて考えるとすごいと思う。

「いつもありがとな」

「ん、急にどうしたのですか、兄さん？」

「こらこら、頭でも打ったのかな？　みたいな顔をしない。

「いや、ただ言いたかっただけだ」

「まあ、父さんと母さんに任されてますしね。これくらいはしないと」

「……ああ、そうだな。　まあ、冷めないうちに食べようか」

「そうですね、では」

『いただきます』

そういって、朝食を食べる俺と理沙。いつも通りの、何も変わらない日常。

「お、この鮭美味しいな」

「わかります？　昨日、新鮮な鮭が手に入って焼き魚にしようと思っただんです」

「ああ、この鮭だけでご飯二杯は余裕だ」

「もう、兄さんったら」

クスクス笑う理沙に、俺も釣られて笑う。

こうして、今日も工藤家の何も変わらない日常が始まる。

## 第二話 変化

「さて兄さん、そろそろ学校に行きましょうか」

「あれ、もうそんな時間か」

食事を済ませてゆっくりしていた俺に、理沙がそういつてくるころには、時刻はちょうど八時に差し掛かるところだった。

俺と理沙は、同じ学校に通っているの、いつも八時になると理沙が教えてくれる。目的地も同じなので、一緒に登校しているのだが、そのせいでいつも幼なじみの結衣と幸也にからかわれたりしたりする。

あいつら曰く『いくら兄妹だからって、高校生にもなって一緒に登校などしない！』だそうだが、この生活をずっと続けてきた俺たちにとっては、あまりピンとこない。

「じゃあ、行こうか」

そう俺が言うと、「はい、兄さん」とうれしそうにいう妹の顔を見ると、思わずこちらまで和んでしまう。

こんなことでうれしそうにする理沙を見ると、こっちまでうれしくなるから不思議なものだ。ああ、こんなことだから、あいつらにシスコンとか言われるんだろうな。

でもいいさ。だって、こんな些細なことだけで、理沙がよろこんでくれるのだから。

玄関を開けた先には、見慣れた景色と、道が連なっている。幸い、この家から学校までは近いから、毎日遅い時間でも遅刻せずに登校できる。

「おはよう、悠くん」

さて、今日も元気に登校しますか。

理沙が、忘れ物をしたらしいので、少しだけ待つことになったけど、まあ、遅刻するほどの時間でもないし、あまり急ぐ心配もないだろう。

「悠くん？」

それにしても、理沙遅いな。一体どうしたのだろうか。

「……………むむむ、こうなったら」

ふと急に、俺の首まわりにやわらかい感触が……………。

これは腕？

「おはよう、悠くん」

そういつて、首に手をかけて抱きついてきてるのは、学園のアイドルこと、一之瀬さんだった。

「……………なにしてるの」

「悠くんが、話しかけても無視するんじゃない」

そういいながら、頬を膨らませて口を尖らす一之瀬さん。

うん、気づいてたさ。

一之瀬さんがさっきから話しかけてきていることも、玄関から出たら待ち伏せているのも気がついてたさ。でも、理解したくなかった。だって、この先の受難が待ち受けていることが分かっているのだから。

「なんで、俺の家の前にいるの？」

まあ、なんとなく分かるけど。

すると、笑顔で、

「だって、昨日にいったでしょ？」また、明日の朝ね』って」

ほら、やっぱり。

あの時は、色々と頭が混乱してて、あまり気にしていなかったが、いづれこうなることは分かっていた。

だが、問題ないさ。そのことも含めて付き合っつて決めただから。でも。

「お待たせしました、兄さん。 あれ、そこに誰かいるんですか？」

「おはよう。確か、理沙ちゃんだったっけ？」

「……………」

……………あ、理沙が固まった。

「少し、失礼します。兄さん、ちょっとこっちへ来て下さい」

その言葉に、素直に従う。

だって、あの眼はやばい。俺の本能が、危険と知らせてくる。

「一体、これは、どういうことですか？ 兄さん」

とびっきりの笑顔で、俺に問いかけてくる理沙。

なんていうか気迫が凄い。今の理沙なら、プロレスラーですら裸足で逃げるレベルだろう。……………けしてそんなことを本人にはいえないが。

「……………いや、……………特に大したことは」

「へえ」

そう言いながら、眼を細める。

あ、やばい。

「学園のアイドルとまでいわれている綾香先輩が、兄さんが登校するまで、玄関先で待ち伏せしていて、それに加え兄さんの首もとに抱きついていたのに、それが“大したことない”って言えるんですね」

「そんなんですかー、と白々しく言う。どうやら今の俺の回答で、機嫌を完全に損ねさせたみたいだ。

さっきまで『はい、兄さん』と、よろんでいたのが嘘みたくに不機嫌になっている。

どうすれば機嫌をなおすかなと考えていると、

「もしかして、兄さん。綾香先輩と付き合うことになったんじゃないじゃないですかね？」

「アハハ、そんなことないだろう」

突然の問いかけに、つい棒読みで答えてしまう俺。

「笑いが乾いてますよ、兄さん。まあ、そんなことだろうかと思いましたが。昨晚、兄さんの様子がおかしかったですし」

やれやれと肩をすくめるでこちらをみる理沙に対して、眼をそらす。相変わらず感のいい妹だ。すると、小さな声で理沙が何か呟いた。

「……………兄さんのばか」

「ん、なんか言ったか？」

「いえ、なんでもありません。あ、そういえばちよつと用事を思い出しました」

では、綾香先輩、兄さん、お先に失礼します。と言い残し立ち去る理沙。一之瀬さんもちよつと戸惑ったようで、二人でその姿を見送ることしかできなかった。

「じゃあ、俺たちも行くか」

「……………うん、そうだね」

そう言いながら、俺たちもゆっくり歩き始める。

「ねえ、悠くん」

「ん？」

「迷惑だった？」

その問いかけにそんなはずないと笑いながら答える。

迷惑なはずがない。だって、俺を待っていてくれたんだろう？

俺の家の玄関先に、いつでてくるかわからない俺たちを、一人で待っていた一之瀬さん。

まだ、俺だから好きになった。っていう理由も聴いていないけれど、こんな姿を見るとつい和んでしまう。

その言葉に安心したのか胸をなでおろすと、何故か急に走り出す一之瀬さん。その走り姿はあまりにも優雅で華麗に見えた。少し見惚れていると、立ち止りこちらに振りかえる。

「ほら、悠くん。早くしないと遅刻しちゃうよ」

そう言いながら、俺を急かす一之瀬さん。胸ポケットから携帯取り出して時刻を見ると、既に二十分を越していた。

「ほら、早く早く」

「ちょっと待ってくれ」

そう言いながら、俺も走り出す。どろぢら、ゆっくり登校している暇はないようだ。

「『兄さんのばか』か」

ただそんな中、理沙のその言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛かっていた。



### 第三話 親友

「はぁ……」

「どうした悠、辛気臭い顔して。なんかあったのか？」

さっきの理沙の言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛かっていた俺は、どうやら思っているよりも、表情に出ているようだ。

「ああなんだ、幸也か」

「『なんだ』って……」

そういつて頂垂れる幸也。無意識でいった言葉だが、予想以上に幸也にダメージを与えたらしい。……とりあえず、こいつをどうにかしとくか。

「あはは、うそうそ冗談だって。お前のことは大事な親友だと思っているよ。……多分」

「おい、聴こえてるぞ」

ジド眼で返してくる言葉に、とりあえず笑ってごまかす。

こいつとは、もう付き合いも長いので気兼ねなくこういった悪ふざけもできる。俺の態度に呆れたのか、幸也はもういいや、と半ば諦めた様子でため息を吐いた。

「そついえばさ、悠。通りすがりに聴いたんだけどさ」

「ん、どうした？」

「お前、一之瀬綾香と一緒に登校してきたって本当か？」

「ぶはっ」

その問いかけに、思いつきりせき込む。

いづれこうなることは予想していたが、正直、遅い時間に登校して、周りに生徒がいなかったので、今日は大丈夫かと安心しきっていた。

大方、誰か窓から俺たちが走ってくる姿を見たのだろう。流石はアイドルといわれるだけあって、その話題性は大きいらしい。

そんな俺の様子をみて、幸也はやれやれと呆れながら会話を続け

る。

「その様子からすると本当みたいだな。……もしかして付き合ってるのか？」

その言葉に再びせき込む。

幸也はとくと、「……おいおいまじかよ」と言いながら顔が引きつっている。まあ、その気持ちは分かる。俺だって幸也が一之瀬さんと付き合っているとかわれたら、同じ反応をするだろう。

「だれにもいっなよ」

「あはは、あんまり俺を甘く見るなよ」

「だよな。俺はお前みたいなやつを親友に持って幸せだよ」

そう言いながら、俺は幸也の背中をバンバンと叩いて、友情を深めあった。

「ねえ、一之瀬さんに彼氏ができたんだって！」

「え、あの綾香様に彼氏が!? 一体どんな人なのかな」

「なんか工藤悠って人らしいわよ。だれか知ってる？」

「えー、知らなーい」

「俺のマイエンジェルに彼氏だと……!!」

「誰だよそいつは、この俺が見定めてやる」

「あはは、みんなバカだなー。僕の綾香さんに彼氏なんてできるはずないじゃないかー」

……………。

「なあ、幸也」

「どうした、悠？」

自分には関係ないみたいな顔をしてこちらを見る幸也。

「まさかとは思つが、お前が情報流したんじゃないよな？」

「はあ? あんまり俺を甘く見るな」

その言葉に、キレだす幸也。

そつだよな、いくら幸也だからって疑い過ぎていた。

「すまん幸也、疑って悪かった。そつだよな、いつも俺を困らしてそれを楽しむ幸也だとしても、流石にこんなこと」

「こんな面白い情報、俺が流さないはずないだろう　痛ッ！」

とりあえず殴った。

こいつだけは許さない。

「うわ、ちょ、やめろって」

倒れている幸也に、さらに殴ろうと立ちあがる。

くそ、こいつを信用した俺がバカだった。普段すっかりしている幸也だが、面白いことには食いつくやつだった。どうやら俺は、こんなことが分からなくなるくらい気が動転していたらしい。

「あのー、悠さん。なんで辞書なんて持ち出してるんでしょうか？」

「あはは、考えればすぐにわかるだろう？」

そう言いながら上に振りかざす。流石にびびったのか右手をこちらに向けて、後ずさりしているようだ。まあ、だからと言ったってやめないが。

「おい悠、それは流石に洒落にならないって！」

……知ったことが。

「せーの！」

幸也に目掛けて振り落そうとした瞬間、クラスの扉が勢いよくバシッと開かれた。

誰かと思いついてみると、もう一人の幼なじみの結衣だった。

「悠これはどういうこと！　綾香と付き合っているって本当なのってあんたら何やってるの？」

「いや、ちょっとした戯れだよ。ほら、俺たちって仲良いからさ」

「おい！　今、俺をその辞書で殴ろうとしてただろ！？」

「それで、結衣。どうかしたの？」

「いや、クラスの女子から聞いたんだけどさ。悠が綾香と付き合っているというのでどこもかしこもその話題で持ちきりよ」

ガン無視ですかー！　と叫んでいる幸也は放っておく。結衣も全

然気にしていないようだ。

それよりも、もうそこまで広まっているか。

そういえば、周りの生徒もなんだか俺を見ながらヒソヒソと話しているような気がする。真相を確かめたいが、聴きだす勇気がないといったところか。

「綾香とは結構仲がいいからさ、聴いてみようかと思ったたら顔を真っ赤にして聴ける状況じゃないし、このままじゃ埒が明かないと思って、悠本人に聴こうかと思ったんだけど」

「そういいながらジド目でこちらを見る結衣。それにしても、結衣と一之瀬さんが仲良いなんて初耳だ。」

しかしこんな早く広まるなんて予想外だ。幸也が言いふらしたりしたとはいえ、いくらなんでも早すぎだろう。

「それで悠、どうなの？」

「本当だよ、一之瀬さんとは昨日から付き合い始めた」

その言葉に、結衣は眼を大きく見開いて、でも何故か頷いていた。理沙も結衣も驚くならわかるが、納得している意味がわからない。

「しかしあんたが綾香とねー、ふーん」

「な、なんだよ」

「別に、目立つことが大嫌いな悠が、綾香と付き合い合うところなるなんてわかってるのに、よく付き合ったねーって思っただけ」

「俺もそう思った!」

まあ、確かにそうなんだよな。

結衣も幸也も、俺の目立つのが嫌いというのは、わかっている。

だから幸也もあんな風になっていたんだろうし、結衣もこうやって確かめに来たのだろう。

正直、俺だって理由はわからない。

でも、何故かあの笑顔に惹かれるんだよなー。

「まあ、話しが聴けたことだし私は教室に戻るわ。悠、がんばれ」

「ん、がんばられて何のことだ？」

「あれのことだろ」

結衣の声援に疑問に思ったが、それはすぐに幸也が解決させてくれた。幸也の指の先には興味心身に聴いていた生徒達。俺たちの声が大きくて、聞こえたのだろう。

……まあ、いいけどさ。

これから忙しいらしい。と思いながら、そつとため息を吐いた。

## 第四話 姉妹

「はあー、疲れたー」

「お疲れ様」

そういつて机にひれ伏す俺に、幸也がニヤニヤとしながら近寄ってきた。

「元はと言ったらお前のせいじゃないか！」

「まあまあ、そんな怒るなって。今度ジューズおごるからさ」

「ジューズって……。お前子供じゃねえんだから」

先程、幸也のせいで俺と一之瀬さんが付き合っているという情報が流れたせいで、クラスのみんなから質問攻めにあつた。やっぱり個人差があるといったものの、皆一様に気になるみたいだ。

元々、クラスに浮かなければいいなと思っていた程度なので、とりわけ仲が悪いというわけでもないが、良いつてわけでもない。ちなみ質問の内容はといたら、「どうして付き合うことになったの？」とか「どっちから告白したの、やっぱり工藤くんから？」とかの程度で助かった。

まあ、一部の男子生徒は憎らしい表情で俺を睨んでいたが。

「大体、お前は昔からそういつたことが好きだったよな。俺が何度被害にあつたことか」

「そんなの今に始まつたことじゃねえだろ？ 気にするなって」

そついいながら肩を叩いてくる幸也に、お前のせいだろと思いがらため息を吐く。まったく、こつちは理沙と一之瀬さんのことで頭がいっぱいというのに、こつやってみんなからの熱い視線を向けられたら考える暇もない。……ああ、今まではあんなに平和だったのいつのに。

今までの生活の幸せさを惜しみながら、今の現状をみてため息を吐く。

「これも全部お前のせいだ」

「まあそういうなよ、どうせ俺が言わなくてもすぐ広まっていたて。何せ学園のアイドルに彼氏ができたってことだからなおさらだ。早いか遅いかの違い」

そう毅然として言われても、ムカつくものはムカつく。

「そんなことは言われなくてもわかっている。でも、納得がいかない」

「ほら悠、いつまでも拗ねてないで飯にしようぜ」

「……まあ、それもそうだな」

不貞腐れる俺に、幸也は笑顔でそう言ってきた。

そういつてコンビニのパンを取り出す幸也に続き、俺もいつもの通りに弁当を取り出そうとしたのだが、

「……そういえば今日、理沙から弁当貰ってないわ」

「おいおい、嘘だろ。あの理沙ちゃんがお前に弁当を渡さないはずないだろ」

「嘘じゃねえって」

その一言があまりにも現実味がないのか、どうやら幸也は信じていないみたいだ。

まあ、確かに幸也の気持ちは理解できる。あいつだって理沙の性格をわかっているからか、食生活に厳しい理沙が、俺にコンビニの弁当とか栄養に悪いものは食わせないように毎日弁当を作っていることは日ごろ一緒に幸也と昼食を食べているからあいつだってわかっているのだろう。

だが、いつまでも弁当を出さない俺に、流石に冗談だとは思わなくなってきたようだ。

「……ひよっとして、マジなのか？」

「お前の言いたいことはわかる、俺だって今気づいたんだからな。でも本当じゃないものはないんだ」

肩をすくめながら、その事実を幸也に伝える。

幸也はというと、「嘘だろ……あのブラコンな理沙ちゃんが……」などと呟いている。俺が一之瀬さんと付き合っていると知った時より

も驚きが大きいようだ。

……そういえば、この学校に購買があったよな。

まあ、理沙の作ったものには劣るが背に腹は代えられない。そう思うやいなや購買所にいこうと思ったのだが、場所がわからない。

「幸也、購買所ってどこにあったっけ？」

「ああ、それなら確かその階段を下りてすぐだったよな。ってまさかお前、購買のパンを食おうと考えているのか？」

もうこの世も終わり、みたいな顔をして言う幸也。

「ああ、食べるものもないしな。この際、しょうがないだろ」

「まあ、それもそうだけどさ。でも、理沙ちゃんが何言ったって俺は知らないからな」

俺は関係ないですよー、と言いながら幸也はパンにかぶりついてた。……まあ、俺だって正直怖いけどさ。でも、流石に食べなきゃもつとひどいだろ。

「じゃあ、買ってくるわ」

そう言い残し、購買所に向かおうと教室の扉に手をかけようとしたその時、いきなり扉がガラガラと開いた。そこには思いがけない人が、というのとはちよつと違う。

……ああ、やっぱり来ちゃったか。

「こんなところまでどうしたの？ 一之瀬さん」

「悠くんと一緒に、昼食を食べようと思って。だめだった？」

「だめなんて言わないでしょうね。せつかく私が綾香をここまで連れてきたというのに」

首を傾げながら弁当を掲げる一之瀬さんに引き続き、俺を睨めつけながら言う結衣。

「言っとくけど悠、綾香はあんたのことを気遣っていたんだからね」

「一之瀬さんが俺を気遣う？ 何に？」

「……だって悠くん、目立つの嫌いそうだし。もう私と付き合っているっていう噂流れちゃって、迷惑かなって思ったから」

私のせいでごめんね、と俺に謝ってくる一之瀬さん。



「綾香、そんな気にすることないわよ。悠だってそうなること重々承知で綾香と付き合っただらうし」

ね？ とこちらを見ながら問いかけてくる。

「そうだって、確かに俺は目立つことは嫌いだけさ。結衣の言うとおり、こんなことになるのは付き合う前からわかっていたことだし、一之瀬さんは気にすることないよ」

「……本当に？」

「本当だって」

その言葉に安心したのか、彼女はほっと胸をなでおろす。

「よかったー」

「大袈裟だなー、もう」

よかったよかったと喜んで言う一之瀬さんに、思わず笑いながら返してしまう。

「笑いごとじゃないよ。……だって、本当に怖かったんだよ。悠くん目立つこと嫌いだから、嫌われてしまわないか心配で」

そう拗ねた口調でいう。だけど、次第に言葉が弱弱しくなっていて、その時のことを思い出したのか、一之瀬さんは泣きそうになっていた。

まだ昨日付き合ったばかりというのに、こんなに俺のことを考えてくれていたなんて。そんなことを思うと、つい思わず頬が緩んでしまう。

「まあ、そういうこと。綾香はずっとあなたのことを気にしていたんだから。ほら綾香もそんなことで泣かないの」

「泣いてないもん！」

「はいはい、わかったからわかったから。よしよしー」

「もう結衣、怒るよ！」

こうしてみると、まるで姉妹だな。

そんな二人の姿をみて、思わずそんなことを思ってしまった。

## 第五話 疑問（前書き）

何故か、お気に入りが増えていった件。

## 第五話 疑問

「さて、そろそろ昼食にしましょうか、休み時間も限りがあるし。

……もう綾香、いつまでも拗ねてないでご飯食べよう?」

「拗ねてないもん」

結衣の問いかけに、そつぽを向く一之瀬さん。どうやらさつき子供扱いされたことに根を持っていらしい。拗ねている一之瀬さんもかわいいなと思ってしまったが、結衣の昼飯という単語に、今日昼食の弁当がないことに気がつきふと時計を見る。昼休みに入ってもう既に十分近く経っている。

そついえばだれか言ってたっけな、購買のパンは人気だからすぐになくなるって。

「だから、悪かったって。ん、どうしたの悠、疲れ果てた顔をして」

「今日理沙ちゃんから弁当貰えなくて、昼飯ないんだってさ」

先にパンを食べていた幸也がいつのまにか、こちらに来ていた。

俺のかわりに幸也が代弁してくれたから特にいうこともなく、空腹に満ちたこの腹を押さえながら、まだ残っている可能性がある購買に足を運ぶ。

「あーそれでかー。さっきその廊下で会ったんだけど、理沙から弁当預かってるわよ」

立ち止まって後ろを見てみると、結衣の右手に見慣れた弁当袋がかかげられていて、すぐさま俺の弁当だとわかる。

「理沙何か言ってた?」

「いや、悠のクラスに向かっている途中に理沙が居たから話しかけたら『これを兄さんに渡してください』って弁当を渡されてすぐにどこかにいったわよ」

そつ言いながら、弁当を受け取る。

そついえば、弁当を渡されていないだけなんだから、理沙のクラ

スに直接行つて貰つてくれれば良かっただけじゃないか。何を勘違いしていたんだろう、俺。

「さて、時間もそんなあるわけじゃないし、今日はここで食べましようか」

本当は中庭で食べたかつたんだけどね。と結衣は言いながら、俺の席の周りの机と椅子を借りることにしてみた。結衣と一之瀬さんがそれぞれの弁当を取り出しながら、それに続くことに俺も取りだす。

「しっかし、あいかわらず理沙も毎日こんな弁当作るわね。私には到底真似できないわ」

俺の弁当を見ながら結衣はため息を吐いた。

おかずに連なっているのは、卵焼きやアスパラのベーコン巻き、鳥の唐揚げに加え金平ゴボウ等だ。鳥の唐揚げに関しては、冷めていても肉が固くならず、ジューシーになっているから大分手間がかかっているんだろうなと察することができると。

「確かに、あいつ多分毎日五時起きだぞ」

「うわー、私には無理。悠も理沙にまかせっきりじゃなくて何か手伝いなさいよ」

結衣が半ばジド眼になりながら、俺に言ってくる。

そりゃあ、俺だってそれを何度しようと思つたかわからない。毎日大変だろうから理沙に手伝おうか？ と、問いかけたこともあったさ。

でもさ、

「兄さんが手伝つと逆に仕事が増えるって言われるんだよな」

『あー、確かに』

何故か、結衣と幸也から賛同をいただいた……うれしくねえ。

「まあ、俺だって理沙の負担を減らしてあげたいんだよなあ。あいつ、いつもどこかで無理するから」

理沙はいつもどこかで無理をする。そして、それを悟られないように笑顔を繕う。本当に自分出来ないもの以外は自分で解決しよう

とする。そのことで何回あいつがぶっ倒れるところをみたことか。すると、一之瀬さんはポツッと一言を呟く。

「きつと、悠くんはそのままでいいんだよ。理沙ちゃんにとってはそれが生きがいだと思うから。悠くんのお世話をするのが、自分の存在意義になっていいるんだと思う」

付き合っただばかりなのに知った口を叩いてごめんね。と、彼女は言う。

「まあ、それもそうなんだけどね。綾香もそんな他人行儀みたいにすぐ謝らない」

「だって、なんか場違いみたいで。そういった話しとかわからないし」

うつむきながら一之瀬さんは答える。

その言葉にハツとなる。そっか、俺と結衣はいつものノリで喋っていたけれど、それじゃあ一之瀬さんがわからないよな。

「ごめん、一之瀬さん。俺、そこまで気が回らなかった」

「良いんだよ悠くん」

そういつて一之瀬さんは微笑む。

その表情は、心なしか悲しそうにみえた。

思わず歯をかみ締める。

俺は、何をやっているんだろう。昨日突然に告白されて、彼女を好きになって。今朝、一之瀬さんは俺と登校するために、家の前でずっと待っていてくれていた。この昼食のときだって、俺のことを考えて、嫌われるのが怖くて来れなかったと結衣が言っていた。

それなのに俺は、周りの眼と今朝の理沙を気にしていただけだ。何も考えていなかった。迷惑じゃないと言っておいて、結局俺は彼女なにをしてあげているんだろうか。

昨日、付き合うことにあんなに喜んでいた彼女のことがふと思いつかぶ。

「悠くんは、気にしなくて良いから」

そんな彼女を俺は、何をしてあげられるんだろう。

一体、付き合っつてぶっつりつりなのだからか。

## 第五話 疑問（後書き）

感想は作者の励みになります。

些細のことでもいいので感想を貰えたら幸いです。

これからの連載に当たって。

今回、執筆してきたの中にあたって、読み返してみると、違和感と構成の甘さを感じました。書きたいことがうまく書かれていないのでこのようなことになったのだと思います。

ですから、誠に勝手ながら、連載を一旦中止して、もう一度から練ってから、再投稿してみようと思っていて、次投稿するときはある程度まとめて書いてから投稿してみようと思っています。

文章が短い面があり、区切りが不自然なのが原因かもしれません。まだ、このことは迷っています。そこでみなさんの意見が聴きたいです。

なお、意見がない場合は勝手ながら、連載を一旦停止して、再投稿することになります。

沢山のご意見を貰えると幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8987w/>

---

学園のアイドルと少年

2011年10月6日03時12分発行